

悦楽のテーマパーク

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 富求乱児

挿絵 しののゆら

プロローグ

第一章 アイドルのお仕事？

第二章 夢の国には裏がある？

第三章 ドキドキ・アトラクション？

第四章 海賊船で危険なパーティー？

エピローグ

006

016

038

085

165

247

登場人物紹介

Characters



こそのうち
小園内 ミナ

子役出身の清純派アイドル。ぱっちりとした愛らしい瞳の少女。

たかすぎ まいか
高杉 麻衣香

帝都テレビのカメラマン。男勝りな性格をしている短髪の美女。

ありま たくみ
有馬 拓海

ミナのマネージャー。麻衣香とは幼なじみの関係。

ありま みねお
有馬 峰雄

拓海の父親。「銀狼」の渾名を持つ辣腕実業家。

の小さな陰裂へと出入りする濡れた巨肉。顔を歪めて屈辱と悲しみに耐える少女の表情。それを見るほどに麻衣香の身体が熱を帯び、拓海のピストンが快感を高めていく。

「あ、ひゃう……うぐう、うああっ！」

スピーカーから響く少女のうめきに合わせて麻衣香は喘いだ。犯される少女を見て感じてしまう異常な自分には見て見ぬふりをした。そして、三度目の射精を受けながら真っ白な高みへと昇っていく。

ミナは鉄格子を握り締め、菌を食いしばった。隣で同じ格好で犯されている麻衣香は甘い声を上げているが、峰雄に自分のそんな声を聞かせたくなかったのだ。だが、それでも突き込まれるたびに襲ってくる痛みで、思わず時折声が出てしまう。それに、スピーカーから絶え間なく聞こえるぐっちゅぐっちゅ、といういやらしい音が犯されているという屈辱を増幅する。

「はあ……くう、うう……あう、んああ……」

峰雄はものも言わず、息子と同じように黙々と背後から小さな少女を犯し続けていた。息子の方は何度か射精したようで、足元には濃い白濁が垂れ落ちている。峰雄の方も久々に味わう処女の感触にあまり長くはもたなそうだった。

(顔もいいが下の方もなかなかの娘だな。狭くて奥まで行くこともできん。もう少し楽し



みたいところだが、そうも言ってもらえんな

陰茎を自分の意思に反して締めつける女褻を呪いながら、ふとミナの頭に先ほどの光景がフラッシュバックした。男の股間に膨らんだ陰囊。このまま峰雄が突き続けたら、あの肉の袋の中身はどうなるか。

「だ、だめっ！ うっくう……や、やめ、あはああっ！」

遂に堪え続けてきた悲鳴が噴き出した。峰雄に何かを言いたくても、口を開けると情けない声が出そうになって、再び歯を食いしばった。

「う、あう……く、や、止め……ああっ、おねが……」

柔髪を硬い棒で突かれる痛みと屈辱、だがそれに混じって確実に快感が芽生え始めている。理性による歯止めが利かない身体が忌まわしい。少女は、嫌悪すべき男に犯されながら感じている自分自身を嫌悪しながら、さらにその先の恐怖に身を震わせた。

「さて、そろそろ……私の精子をたつぷりと注ぎ込んでやるぞおっ！」

ずしん、ずしんと窮屈な膣奥を突き上げてくる硬い異物が、どくどくと奇妙な脈動を始めている。熱い汚肉の塊が、焼けた鉄のようにますます熱くなっていく。

どくん。

奔流が、少女の幼い体内に吐き出された。何が起きたか気づいたときには、熱い汚液が小さな膣内に溢れ返っていた。しかも、それは止まることなく次々と注ぎ込まれてくる。

「ああ、ちよ、ちよっと待っ……そんなの……あ、あ、い、いやあああああつっ！ 熱い！ 熱いのが入ってきてるう！ 止めて、止めて止めて止めてっばあ！」

峰雄の子種、つまり拓海を作ったものと同じものが、自分の膣内に注ぎ込まれたのだ。瞬間的に女壺は激しく収縮し、さらに忌むべき精液を吸い出しては、膣奥に流し込んでいく。

怒濤のような射精を続けながら、銀髪の男は激しく腰を突き込む。膣内であらゆる粘液が掻き回され、一際熱く濃い液体が胎奥へと流し込まれる汚らわしい感覚が少女を戦慄させる。膣の奥にある子宮まで男は腐液を流し込もうとしているのだ。

「やだよおっ！ 熱いので、いっぱいになってるじゃんかあつ！ うあ、んはあああつ！」
おぞましさに全身を震わせても、根を張ったように肉棒は幼膣を満たしたまま、未だ腐液を噴き出し続けている。無数の肉襞一枚一枚の間に、細胞一つ一つに擦り込むように灼熱棒が動き、清純な少女の神聖な秘所を余すことなく汚していく。その熱さとぬめぬめとした感触が、今やミナの心の全てを満たしていた。嫌悪感と恐怖で、今にも気が狂いそう

だ。
「うあああああんっ！ やだ、やだっばあああつ！」

忌むべき男の精子を膣奥まで注ぎ込まれたことを、全てを汚された現実を否定したくて、ミナは力の限り声を振り絞った。だが、どんなに否定しようとも、少女のバージンを奪い

取った男が何度も腰を突き込み、白濁の精液を注ぎ込んでくる。そして、心がどんなに嫌悪しても、秘唇は意に反して陰棒をぎゅうぎゅうと食い締めて、肉襷は流れ込んだ精液を奥へ奥へと押し込んでしまう。

すぶりゆるう。

ようやく肉塊が抜き取られると、ミナはその場にへたり込んだ。腿の間に熱くぬるぬるとした感触がある。愛蜜、破瓜はかの血、そして呪わしい子種の感触。

「うう……」

隣では、ようやく麻衣香が解放され床に倒れ込んだ。ミナの純潔が奪い取られる間、五回もの射精を受け止めたボーイッシュな美女は、すでにいきっぱなしの状態になって白目を剥いたまま痙攣し続けている。

「さて、これでようやく君たちをナイトメアランドに送り込むことができるな」

見下す男の股間から、桃色に濁った粘液が少女の顔へと滴り落ちていく。今度は、ミナも冷たい視線を投げることができなかつた。

第三章 ドキドキ・アトラクション？

アイドルとして、同時に一人の女の子として決して失ってはならないものを奪われ、見られてはならない姿を晒された小園内ミナ。だが、気を休める間もなく、早くも次の仕打ちが待ち受けていた。今、彼女は見慣れた衣装をかつてない屈辱的な心境で身に纏おうとしているのだ。少女の秘密を思う存分掻き回した有馬峰雄は、ミナと麻衣香の前にマネキンに着せたあるコスチュームを持ってこさせていた。そして、大きな口をニッと広げて笑いながら告げた。

「ナイトメアランドに入る前にその汚れた服を着替えていくがいい。お前たちに相應しい衣装を用意しておいたからな」

「相應しい服って……な、なんでこの服がこんなところにあるのお？」

まだ破瓜の痛みが消えないミナは、その衣装を見た衝撃で目を見開いた。ミナと同じサイズのマネキンのボディにびったりと張りつく黒いエナメル質の光沢を持った服。そして、黒い長髪のカツラの上にはナイトラビットのトレードマークでもある黒い兎耳が突き出している。そう、これはナイトラビットのコスチュームだ。ただし、本来は丈が長いフリルスカートがほとんど股間が見えるほどに短く、生地も薄くなっている。その上、パニーコ

トの露出度も高いせいで妙な淫猥さを醸し出していた。

「あたしにまで……なんだよ、これ？」

麻衣香が目の前マネキンを見て呆然としてよろめく。拓海に何度も絶頂に送り込まれて、まだフラフラしているのがミナから見ても分かるほどだ。彼女の前に置かれたのは、ミナの衣装を真っ白にしたもの、つまり、ホワイトラビットの衣装。もちろん、ハイレグでフリルも短い。ただ、あの大きな胸を押し込めるよう、胸の部分には余裕が与えられているようだ。

（こんなにミナたちに合わせた衣装まで用意してるなんて、よっぽど周到に準備された計画なんだ……）

ミナは改めて自分たちを押し包んでいるどす黒い力の強さを知らされた思いがした。同時に、これから続く羞恥の宴がどれほどのものか計りかねてしまう。

「何をぐずぐずしている。早く着替えんと時間がもつたいないぞ」

有馬峰雄ことキャプテン・ナイトメアの言葉に二人は思い出したように時間のなさに気がついた。

（制限時間は十時間……今、どれだけ経っちゃったんだろ？）

腕時計を見ると永遠とも思えた先ほどの陵辱が、ほんの一時間ほどだったと分かった。まだまだ時間はある。だが、それは、ナイトメアが二人をいたぶる時間でもあるはずなの

だ。それでも、急がないわけにはいかない。ミナが衣装をマネキンから取るうとすると、麻衣香も同時に衣装に手を伸ばす。しかし……。

「麻衣香君！ 何をしているのかね？ 君の仕事はナイトラビットを撮ることだぞ。代わってやるのはさつきで最後だ。さあ、カメラを持ちたまえ」

その言葉には、ナイトラビットと呼ばれたミナの手も止まった。女カメラマンが、まごついた視線を少女に向けると、震える手でカメラを持ち上げる。麻衣香とて下半身には何も見につけていないほとんど全裸に近い格好なのだが、そんな格好でもカメラを構えているのと着替えをカメラに撮られるのでは、どっちが恥ずかしいかなど比べるべくもない。

「ごめん……ミナ……」

謝罪の言葉が震えている。ミナは、それでいいよ、と言うかのようにカメラの方に頷くとマネキンから衣装を脱がせた。それが終わると、今度は自分の服を脱いでいく。姉妹のように仲良くしてきた麻衣香のファインダーが、自分の脱衣の様子を捉えているのが痛いほど感じられる。

（だけど、今は、しょうがないよね……ナイトメアの言うこと聞かないと、拓ちゃんを助けられないもんね。我慢だよ、ここは！）

小さな少女の背後にある巨大なスクリーンには、アイドルが濃紺のジャケットのボタンを一つずつ外していく様子が、大きく映し出されている。観客は先ほど凄惨なまでの陵辱

劇を見たばかりにもかかわらず、輝く星の下に生まれたはずの哀れな娘が、公衆の面前で脱衣を強要されている姿を固唾を飲んで見守っていた。

ジャケットを脱いで、スカートのジッパーを下ろすまではよかった。だが、気持ち^せが急いでいるのに、手はスカートを下ろそうとはしない。スカートを脱げば、下着を穿いてない股間やお尻がカメラで映し出されてしまうのだ。

「ミナ！ 急がないと……」

急かす声は思わぬところから上がった。麻衣香だ。もちろん彼女も拓海を救いたい気持ちで言っているのだが、一方ではファインダー越しに見る可憐な少女の裸身を早くカメラに収めたいと心の奥底で思い始めていたのだ。それは麻衣香自身もはっきりとは気づいていなかったが。

ファサ……

ミナは唇を噛み締めると、思い切ってプリーツスカートを引き下ろし、掴んでいた手を離した。チェック柄のスカートが床に落ちると、涼やかな風が剥き出しの股間を撫で、同時に観客のため息やどよめきが耳を襲う。

（み、見ないで……お願いだから……）

ささやかな願いも届くはずがない。コンプレックスでもある無毛の股間も小さいながら締まった可愛らしいお尻も、興奮気味の麻衣香のカメラでしっかりと捉えられ、巨大スク

リーンを通して衆目に晒されている。さんざん陵辱の場面を見られたというのに、素肌を見られる羞恥は消えることなどなかった。それでも、恥ずかしいのを我慢して脱ぎ続けるしかない。ブラウスを脱ぎ、ナイトメアの無言の指示によってブラジャーをも取り去る。

（麻衣香さん、もつと離れてよお……）

頬を真っ赤に染める少女に女カメラマンは無遠慮に近寄っていた。片腕に隠された淡い膨らみが見えそうで見えない。カメラマンに徹しすぎている彼女には、ミナの気持ちが見えなくなっているようだ。だが、ナイトメアに言われてやっている以上、仕方のないことだと思っていた。文句を言えば、拓海の身に危険が及ぶかもしれない。いや、卑劣な男のことである。必ずそう脅しをかけてくるに違いない。

（今までさんざん守ってもらってきたんだもん。今度は、ミナが拓ちゃんを守らなきゃ！）
悲壮な決意を胸に秘め、せかせかと網タイツを履くと、次に黒い光沢を放つボディースーツを手にする。その瞬間、露になった淡い雪色の膨らみが観衆の眼前に現れた。ほんのりと赤みを帯びていながら、白磁を思わせる美しく滑らかな表面。その小さな丘の頂きにぼつとりと鎮座している桜色の乳頭は、指で摘むのがやつとというほどの大きさしかない。未熟な乳首に相応しく、その裾野に広がる乳輪も控えめな色づきだ。全体的にほっそりとした身体だが、ウエストがくびれているせいで少女の割には色気もある。男たちの視線が自らの白い裸体に絡みついて意識しているせいで、徐々に全身が朱色に染まって

いく。そして、乳首が微妙に硬く尖っていくのをカメラは見逃さない。

「おおっ、見たか？ 興奮してんじゃねえの？」

「恥ずかしがつてるだけだろ？ でも、意外に露出狂なのかもな。女優とかには多いらしいから」

（勝手なこと言わないでっばあ……）

観客たちの聞こえよがしの声にミナは耳を塞ぐこともせずに、急いでハイレグを着込んだ。かろうじてあるという程度の股布が股間に当たると、ぬちりと濡れた感触がする。先ほどの行為による淫液の残滓だろう。すると、スクリーンを見上げた観客がおおっと声を上げ、思わずつられて背後を振り返ってしまった。

「ま、麻衣香さん！ だ、だめだよおおっ！」

そこには、ハイレグの隙間から滲み出た白濁が、網タイツの上をぬらぬらと垂れ落ちていく様が映し出されていたのだ。思わずその場にへたり込んだ瞬間、今度はぶじゆるっ、という盛大な淫音がマイクを通して響き渡る。

「あ、ご、ごめん……あたしっしたら……こ、こんなの撮るつもりなかったんだけど……」

（ひ、ひどいよお、麻衣香さん……）

ショートカットの女は申し訳なさそうな顔をしてはいるが、ミナにとって峰雄の精液が自分の中に放たれていることを思い知らされるのが最も辛いのだ。穿いたばかりのパニー

コートと網タイツがねっとり肌と肌に張りついて、汚されたという禍々しい事実が再び浮き彫りにされてしまう。だが、そんなことで麻衣香を責めるわけにはいかない。

「み、ミナ、大丈夫だよ。気にしないでっば、麻衣香さん！」

ブラウン管を飾った太陽のような笑顔が、淫猥な姿には似つかわしくはなかった。だが、それこそが、ミナの芯の強さの証なのだろう。麻衣香も四面楚歌の状況にいる中、小さな友人に救われた気分になった。

「へたり込んでる暇があるのかな？」

銀髪の怪人がほくそ笑んでいる。ミナはきつと睨むと、立ち上がってブーツを履き、カフスのついた手袋をはめ、蝶ネクタイと襟をつけ、最後にトレードマークの長い兎耳を頭につけた。黒い流れるような長髪は、先ほどの陵辱の際に乱れていたのが嘘のように綺麗に背中へと流れていく。髪が流れ落ちた背中が剥き出しになっているのは、テレビで使っている衣装より露出度が高いバニーコートのせいだ。胸は隠されているとはいえ、扇情的なまでに肩から肩甲骨、胸上の白い肌を晒け出し、優美に反った背筋を腰元まで覗かせている。手首に白いカフスがついた手袋と膝上までの長いブーツは黒い革製で、光沢感のあるボディースーツとともに少女に不似合いな色香を漂わせていた。それを補うかのようにふわふわとした大きなリボンと黒いレース地のフリルスカー트가腰に巻きついているが、お飾り程度でしかなく、切れ上がったハイレグの股間が露になっていて、白いウサギの尻

尾がついたお尻も丸見えだ。ナイトラビットのコスチュームに似せてはいるが、猥褻な意図がはつきりと分かるほどに生地は薄く作られていて、張り詰めるほどにフィットするボディースーツの胸元には、淡い胸の膨らみの頂きで息づく乳頭がこれみよがしに浮き上がっている。股間の方も陰唇の形や谷間の筋、さらには肛門の膨らみまで分かるほどに食い込んで張りついているのだ。

「ほら、お望み通りナイトラビット参上よ」

敵を睨んだまま、冷然とした声できっぱりと言い放つ。何より恥ずかしさで身を灼かれるほどの思いだが、それでも健気な少女は悪辣な男への挑戦的な態度を保とうとしていた。「よかろう。では、麻衣香君、君も急いで着替えるといい。それと、中に入ったらこれを使ってくれ」

そう言うと、ナイトメアに扮した峰雄は、カメラを置いた麻衣香に小さな包みを渡した。不審がりながらも受け取ると、自分も急いでホワイトラビットの衣装に着替えていく。

（うわあ、やっぱり麻衣香さんってば大人の女だよ。すごい色っぽいんだもん……）

彼女の容姿は元々カメラマンにしておくには惜しい。ステージを見る観客も思わず嘆息を漏らしたほどだ。しなやかな曲線を描くラインはつま先から指先まで完璧と言つていいほど美しい。細いながら適度に肉付いた手足は長く、むっちりとしながらも引き締まった健康的なヒップ。一切の贅肉を省いて、見事にくびれたウエスト。たわわに実った巨大な



果乳には、朱色の乳量が膨らみ、硬くしこった乳首が野イチゴのようにつんと立っている。肌はミナほどに白くはない。だからこそ、真っ白なホワイトラビットの衣装を纏うと、その美しさが際立ち、黒い蝶ネクタイが控えめにアクセントを添える。テレビに出ているホワイトラビットよりもはまっていた。そして、そこにはミナが望んでも手に入れられない紛うことなき本物の大人の色気が溢れ出している。

「さあ、ミナ。行こう……」

ホワイトラビットとなつた麻衣香が、カメラを手にしてミナの手を引いた。二人のバニーが観客席の方へと向かう。観客席の中央には通路があり、二階席の下にナイトメアランドへと続く門がある。いつものボーイッシュな姿を捨てて、完璧な艶香を放つ麻衣香にエスコートされながら、ただでさえ小柄なミナは、ますますステージの上で小さくなっている。だが、中央の通路を歩いていくと、やはり観客の視線はミナに集まる。たとえ麻衣香が美しく色気を放つていても、国民的アイドルのオーラには敵わないということだ。破瓜の責め苦を受けたばかりのうら若い乙女を男たちは好色そのものの視線で無遠慮に舐めまわした。所詮、アイドルなど男の性欲を煽り立てる偶像に過ぎなかつたのだらうか。野獣たちの黒い情欲に押しつぶされそうになりながら、少女は淫楽の園へと続く門の前に立つた。真っ黒な鋼鉄製のゲートが左右へゆっくりと開いていく。

「闇より呼ばれし獣は、闇に還るものよ、キャプテン・ナイトメア」

ゲートが開ききる前に、ミナ、いやナイトラビットは振り向いて宿敵へと言い放った。だが、勇ましいヒロインの言葉を淫夢の怪人は冷笑に付した。

「ククク……御託はいい。さあ、リポートを始めたまえ。今宵のナイトラビットはヒロインではなく、世紀のテーマパーク、ナイトメアランドのリポーターなのだから」

黒兎の少女は侮蔑の視線を返すと、意を決してカメラの方を向いた。

「今からミナ……ううん、わたしはキャプテン・ナイトメアが作ったナイトメアランドに入ってくよ。この先に一体何が待ち受けているか分かんないけど、必ず悪を滅ぼすために、ここに帰ってくるからね！」

カメラを通して敵に決意を言い放つと小園内ミナことナイトラビットは、門の奥へと足を踏み入れた。生暖かい空気が綱タイツの上から脚へと絡みついてくる。そこは狭い洞窟のようで、奥は暗くて見えない。

「暗いのはいいんだけど……なんか生臭あくないい？」

再びカメラの方を向いて後ろ向きに歩いていく。麻衣香の方は暗がりでも分かるほどに怯えていた。

「わたしはいつも闇夜を跳び渡ってるんだから、こんなところ怖くもなんともないんだから。ホワイトラビットは苦手みたいだね」

カメラに向かって意地悪に笑ってみせたミナ。茶化された麻衣香は、しかし何かを警告

するように片手で背後を指し示している。

「何……うぶっ！」

振り向いた瞬間、柔らかくぬめった何かにぶつかった。慌てて後ずさった兎娘の前を異様なものが塞いでいる。紫色のスポンジだかビニールだか分からない材質で大人の脚ほどの太さがある柔らかい柱が地面から天井まで伸びているのだ。しかも、同じ柱が歯ブラシの毛のように無数に隙間なく通路に生えている。

「び、びつくりしたあ！ えっと、これが最初のアトラクション……なのかな？」

「あ、確かパンフレット渡されたっけ……」

ホワイトラビットこと麻衣香が思い出したようにカメラについているポケットを開く。小包と一緒にナイトメアランドのパンフレットを渡されたのだ。

「えーっと、ああ、これだ……ワームゲート……だっけさ」

パンフレットを見ると各アトラクションの解説がされていた。それをリポーターであるミナに渡す。

「えっと、ワームゲートは人工の淫虫で、地中に流れた体液を吸い出して体表面から分泌する……そのぬめる触感は巢に侵入を試みた獲物に異世界の秘夢を見せるだろう……なんなのよ、これ？」

パンフレットの説明文を読んだミナは、よく分かんないや、という顔をしてカメラマン

にパンフレットを返した。すると、どこからか聞き覚えのある低い声が響いた。

「余裕を見せているようだが、いつまで続くかな、ナイトラビット」

「キャプテン・ナイトメア！ もったいぶって、なんの用よ！」

「ククク、先ほどの君の淫らで無様な姿を見て射精したお客様がたくさんいらつしやる。その方たちのスperlマは、余すことなく床から吸収されてその通路へと届けられるのだよ。存分に味わうといい。それと、麻衣香君、いやホワイトラビット、先ほど渡したものを忘れてるぞ」

ミナは峰雄の説明を聞いて、改めてワームゲートを眺めた。表面から滲み出ている粘液は確かに白く濁っている。そして、この生臭さは自分の中に吐き出されたおぞましい腐液の臭いに酷似しているではないか。

「なんて悪趣味なのよお……これが、ナイトメアランドってわけだね……」

「悪趣味なんてもんじゃなさそうだよ……狂ってるよ……」

ハスキーな声に振り返ると、小包を持った麻衣香が説明書きらしきものを見ながら顔を朱に染めて立っていた。そして、黙ってその紙をミナに手渡す。

（包みの中身を黒兎の秘窟へ……）

声に出さずに何度もその短い文章を読み直す。意味が分からずに麻衣香を見ると、ちょうど小包の中身を取り出したところだった。その手には、丸いイボのついたピンポン球の

ようなものが二つ乗っている。

「た、多分……秘窟っていうのは、その……アソコのことだと思う。だから……」

いつもははつきりと物を言う麻衣香が、いかにも言いにくいといった風に言い淀む。言いやすいわけがない。それはミナにも簡単に分かった。あの悪辣な男は、貫いたばかりの秘裂にえげつない玩具を仕込めというのだ。ミナは恥辱に頬を染めながらも、ワームゲートの前に跪ひざまずいて四つん這いになると、白兔に扮した美女に尻を差し出した。

「は、恥ずかしいからさ、さっさとやっちゃってよ」

少しでも麻衣香の気持ちと和らげようと軽い調子で言う。だが、その言葉さえ今ごろステージでは嘲笑をもって迎えられているに違いない。ゆっくりと股布がずらされるのを感じながら、少女は唇を噛み締めた。

(き、綺麗だな、ミナのアソコ……)

同性ながら見とれてしまうほど無垢な桜色の秘唇。まだ青い秘園は色素の沈着が起きておらず、未発達未発達の陰唇を指で広げると、麻衣香はその柔らかな感触に再び驚かされた。そして、ゴクリと喉を鳴らしながら、一つ目の玉を肉口に当て、ゆっくりと押し込む。

「くうっ……」

まだ、先ほどの行為の残滓があるためそれほどではないが、幼い淫裂を押し広げる痛みがミナの背筋を駆け抜ける。徐々に玉が入ってくると、そのイボイボが襲を撫でるのが一

一つ一つ感じられた。

「ま、麻衣香さん……一気に入れちゃっていいから」

「わ、分かった。痛かったら言いなよ」

今度は、ぐっと強く押し込まれた玉が奥に入り込んでくる。二つの玉が中でぶつかると、イボ球を押し込んでいた麻衣香の指がにゅぷにゅぷと引き抜かれていく。

(ミナの愛液……透き通ってて、すごくてねっとりしてる……)

麻衣香の長い指に絡んだ少女の愛蜜が、指の間に長い糸を作った。だが、立ち上がった少女に見られる前に服でふき取る。

「さ、は、早くこんなところ通っちゃおうよ……ね、麻衣香さん！」

「あ、ああ、そうだね」

股間の異物感に顔を歪めながら、ミナが健気に微笑んでくるのが痛ましい。だが、峰雄はこの玉を抜くのを許しはしないだろう。すでに諦めの気持ちに包まれた麻衣香は黙ってカメラを手にすると、ワームゲートに入ろうとするナイトラビットの背中を撮り始めた。

「やだ、すごいネバネバしてるよお……」

両手で紫色の柔柱を広げてみたが、ワームの列はずっと奥まで続いているようだ。閉所恐怖症だったら耐えられない通路だろう。匂いのあることあるから、息をするのも大変だ。

「くっさ……き、きつくて通れないよお！」

思い切つて身体を押し込んだ方がいいが、すぐに身動きが取れなくなってしまった。だが、留まっていると生臭い粘液がどんどん溢れ出してくるようだ。黒い衣装が早くも白濁にまみれ始める。

「ミナ……じゃない。ナイトラビット、あたしのあとについてきなよ」

横から回り込んだ麻衣香が、ミナの前に現れた。さすがに遅しい彼女だけにやすやすとワームの列を押し広げて進んでいく。

「あ、ありがと、ホワイトラビット。つて、ちょよ、ちよつと待つて！」

ずんずん進んでいく麻衣香の背後ですぐにワームが閉じていく。慌てて追いかけるミナのために、再び白衣の美女がワームを押し開けてくれる。だが、よく見ると彼女も決して平然と中に入っているわけではなかった。すでに短めの髪が頬や額に張りつくほどべつとりと濡れていて、湿ったボディースーツからは乳頭の桃色や茂みの黒い影が透けて見えるほどになっているのだ。

（この生臭いのを身体中に塗りたいくらいでいい？ そんなのやだよ……）

泣きたくなる思いだったが、麻衣香の苦労を無駄にはできない。こうして女カメラマンは撮影をしながら先を行き、比較的通りやすくなつた道をミナが進んでいく。だが、ぎゅうぎゅうと狭まるワームは思うように二人を歩かせない。

「ちつくしよ……この、うぶぶつ！ ……うええ、きつたなあ！ 舐めちゃつたぞ。ん

むむう、ぷへっ！」

白装束の美女は紫柱に顔を押しつけては悪態と唾を吐いている。うっかり口が当たると、ワームは口内まで入ってくるほどの勢いで粘液を噴出してくるのだ。すでに巨乳を包む麻衣香のボディースーツは、ペロりとめくられて豊満すぎるバストがこぼれ出してしまっていた。その巨豊が進むたびにワームに挟まれて揉みくちやにされる。瑞々しい肉肌に腐液を塗りたいくらいなら。

「ん、ちよっ……胸が挟まって……くっ、今度は脚か！ うう、ふ、服も直せないよ、こんな……んうう、く、食い込んで……」

脂の乗った美脚もねっとりぬめる壁に舐めるように擦れ、ハイレグの股布がねじれていく。ぽってりとした陰唇がはみ出してしまふ。しかも、誰とも知れぬ男が放った精液の染み込んだ紐状の部分が、敏感な淫核をこすり、肛門にまで食い込んできている。すでに麻衣香は頬を赤らめ、息も荒くなってきた。

「ま、麻衣香さん、大丈夫？」

麻衣香が疲れていると勘違いしているミナにも、ワームゲートの効果が出始めている。黒いボディースーツがうつすらと透けて、尖った乳首が見えてきているのだ。小さな乳突起がワームに擦れて、粘ったスペルマが擦り込まれてくる。エナメル生地を押し上げる肉粒がゴム上の柱にゆっと食い込むと、じゅわりと白濁が湧き出す。その臭い、その感触

が先刻の忌まわしい傷跡をじんじんと疼かせ、汚辱への激しい嫌悪感がみなぎってくる。今や全身が無数の男たちが放った子種にまみれていた。

「た、拓ちゃん助けたら……んはあ、絶対、あいつを蹴っ飛ばしてやる！ うむむう、くはっ……」

ドロドロになった長い髪も顔に張りついているし、股間も麻衣香と同様の状態だ。いや、恥毛のないミナの場合は、守るものがない分、食い込みは激しく、刺激もより大きくなる。しかも、成長途中の女壺には悪魔のような玩具が収められており、少女には強すぎる刺激が津波のように襲ってきていた。

「はあはあ、やだ……ミナのお腹の中で……アレが……」

歩くたびにザーメンを全身に浴び、小さな女臍をおもちゃでぐにゅりと掻き混ぜられている。身体にびったりとフィットしているはずのバニーコートの中にも精液が染み込んできて、動くたびに服がぬちよぬちよと肌を撫でてくる。まるで、男に舐められているか、ぬめった淫棒を擦りつけられているかのようだ。今ごろ、スクリーンを見ている観客は、自分たちの精液にまみれたアイドルを見て大喜びしているに違いない。もしかしたら、さらなるスペルマを放出しているかもしれない。

「も、もう少しの辛抱だよ。きつと、もうすぐ……え？」

励ましの声を搾り出した麻衣香が急に立ち止まった。彼女の手が、なぜか硬い壁に触れ

たからだ。出口ではない。左右を探ってもやはり壁。どう考えても行き止まりだ。

「まさか、迷路になつてるんじゃない……」

「そんなあ！ 通路もちゃんと見えないのに、どうやって出口見つけろっていうのお！」

絶望的な麻衣香の呟きにミナは声を荒げた。一人とも白濁にまみれながら歩きつづけ、すでに身も心も限界にきている。しかし、この窮屈で卑猥な場所に留まっているわけにもいかない。まるで完走したマラソンランナーの汗のように、二人の顎からは濁った粘液が滴り、全身に染み渡っていた。このまま、止まっていれば粘液の風呂に浸かることになるかもしれない。すでにつま先は白い液体に浸かっているくらいだ。

「仕方ないよ。戻って脇道を探そう」

麻衣香は来た道を逆戻りして別の通路を探した。ミナも身体を襲う淫靡な責め苦に耐えながら、その後に続いた。柔らかな柱に触れる手がねちよねちよと音を立て、黒いブーツを白濁からずりと抜くたびに粘ついた糸を引いてくる。トレードマークの兎耳も濡れて垂れ下がっており、股布が食い込んでいるせいで尻尾を留めている金具が肛門にぐりぐりとねじ込まれてくる。性感の未熟な少女には、それは純粹な快樂というよりも痛みでいたぶられているような屈辱だった。そして、何より一步一步が永遠に思えるほどに、身体をイボイボの凶器とねじれた股布が蝕む。包皮が捲れ上がった淫核から柔らかな秘肉に挟まれた恥裂までぐちゅぐちゅと細紐が音を立てて擦りたて、窮屈な膣内を一杯に押し広げる

淫具がまだ青い肉襖を揉みほぐすようになぶってくるのだ。しかし、友人によって仕込まれたイボ球の効果を、恥辱に耐えるミナはまだ分かっていなかった。

「ちよ、ちよつと、この捻れてるの直していいかな？　つて、あれ？　麻衣香さんっ！」
曲がり角があつたらしく、麻衣香の身体が横に消える。慌てて後を追おうとしたミナの足先がワームに引っかかった。

「うわっ、ちよ、あ……ああああつ！　うぷううつ！」

倒れながら両手がワームに絡め取られ、顔面から腐臭漂う液溜まりに突っ込んだ。口内や鼻腔にスペルマの奔流が押し寄せ、頭がくらくらするほどの悪寒が襲ってくる。

「ぷはああつ！　はあ、あ、んううつ……お、お腹、かき回してらうつ！」

慌てて顔を上げようと動いた瞬間、体内の玉が擦れ合い、女壺を急激にそれぞれ逆方向に掻き回したのだ。うめくように喘ぐと、黒い衣装に身を包んだ少女はその場に崩れてしまふ。自慢の黒髪も陶磁器のように白い肌も、忌むべき子種の溜め池に浸かっているが、経験の浅い柔らかな粘膜を掻きむしられる感覚に抗う術をミナは知らないのだ。体内から熱く立ち昇る禁断の性感に身動きも取れないまま低くうめくことしかできない。

「くうう、な、なんか……中が……変な感じになっちゃう……」

すでにワームに撫でられ続けた身体は、肉舌にたっぷりと舐められたのに似て、長時間の前戯を受けたようなものだ。幼い性感を知らぬ間に掘り起こされたミナは、目の前が白

い霧に覆われていくようだった。

(こ、これを感じてるっていうのお……？ だ、だめえ、こんなので感じたくないっ！) 意思の力を振り絞って身体を起こし、汚液の沼から脱しようとするが、つかみ所のないワームに手が滑り、再び汚濁へとはまり込む。そして、またしてもぐにゆりと膣内を掻き回される。

「うっ、ううううんっ！ はあ、あ、ふうう……」

味わったことのない快感に意識が朦朧として、無意識に快楽を求めて太腿を擦り合わせる。そのたびにイボ球は期待通りの効果を与えてくれる。少女はしばし食欲にその肉樂に浸った。黒いブーツと網タイツに覆われた細い脚が、じゅぷりじゅぷりとスペルマを掻き回し、イボ球の動きに合わせて小さな尻を揺らす。

(す、ごい……これえ。このまま続けたら、どうなっちゃうのお？ な、なんか怖いけど、すぐく……)

前のめりになった身体を白濁沼にずぶりと沈めて、硬く勃起した乳首を床に擦りつけてみた。硬い床とぬめるザーメンの感触。少女のまつげがふるふると揺れる。お尻に当たったワームにさらに尻を押しつけると尻尾の金具が肛門を抉り、ねじれた股布が秘芯から陰肉まで擦り上げてくる。秘奥からじゅわりと湧き出してきた濃密な愛液が性具の動きをさらに活発にしてしまう。

「だ、ダメだつてばあつ！　こ、こんなことしてられないの、ミナはっ！」

溺れかけた快楽から氣力で脱すると、ミナは再び立ち上がる努力を再開する。とにかく、手首はつるつると滑るゴム状の柱にがつちりと挟まれて抜くこともままならない。なんとか脚の力だけで立とうと思ひ、床についた膝に力を入れるが、途端にぬるつと滑つて、腰が股間のワームに押しつけられてしまう。

「くっ、ふう、ううん……」

愛らしい唇を白い前歯が噛み締める。先ほど顔から倒れたために顔面に付着したスペルマが口内に入ってきてしまうが、それよりも股間に食い込む捻れた股布と生暖かい精液の感触の方が鮮烈で、嫌悪感を呼ぶ。

「あ、ちよ、脚まで……抜け、ない……って、ああああん！」

右足が絡まったので左足のつま先に力を入れたのだが、それもまたぬるりと滑つて、両足がびんと伸びた状態で抜けなくなつてしまった。狭苦しい空間で仰向けに×の字になりながら、小さな肢体はかろうじて腐液の湖面に浮いていた。

「やだ、ちよ、滑つて……お、溺れちゃうよお！」

徐々に手首と足首が滑つていく。股間に挟まった柱が舌で舐めるように幼唇を這いずる。脇の下や腰、首筋にもワームが這う感触が悪寒と快感を運んでくる。だが、顎から徐々に白沼に浸かっていけば、溺死の恐怖すら身に迫る。



「こ、こんなので溺れたくないってばあつ！ あ、ううううつ！！」

もがいた瞬間、弾かれた琴線のように全身を包むワームが震え、少女の柔肌をなぞり、ぬめり、這い回る。末端神経から胎奥まで甘く汚らわしい肉悦が染み入ってきた。

「うわ、これ、絶対やばい！！ なんとか、はあうう……ぬ、抜けださ、なきや……」

もがけばもがくほど深みにはまっていく。破瓜したばかりの膣口からは甘い淫臭を放つ粘液が溢れ出し、それが紫柱から滲み出る白濁と混ざり合つて太腿や下腹へと垂れ流れ、臍の辺りから粘柱と化して腐液の沼へと落ちていく。手足が自由にならないため、何度も仰け反つては力尽きて、その液溜まりへと顔から突っ伏してしまう。愛らしい鼻梁から垂れてくる濃汁が桜色の唇から口内へと侵入してくる。舌に絡みつくゼリー状の液体を吐き出すこともできないほどに喘いでいる少女は、力なく喉を鳴らしてはそれを嘔下えんかしていく。

「うぶつ、かはあ、んぐ……けはつ、こほつ！」

吐き気がするほど生臭くて濃密な液に溺れかけながら、それを飲み、そして下半身では淫蜜のぬめりによる快楽を受け止めてしまっている。ぴくぴくと脈打つ乳首と恥ずかしいまでに勃起した淫核。苦しさと汚濁の中で、ミナは脳を白く焦がす快楽をなんとか跳ねのけようとしていた。

（麻衣香さんが、きつと助けてくれる。それまで、恥ずかしいけど……耐えなきや！）

股間と薄い双乳から注がれる快感に溺れてしまえば、憎らしい男たちに屈するようなも

のだ。少女は無我夢中で手足や尻を振って脱出を試みる。だが、意識には白い霞みがかかり、次第に快楽だけが身体を支配していく。

「ん、んう、あ……すぐ、今のいい……なんか、擦れると……ひ、あ、あううう……」

意識が朦朧としていく中、少女の身体は白濁へと沈んでいき、口内から喉奥までどぶどぶとスperlマが流れ込んでくる。

「ミナ、どこ行っただよ？ おい、ミナ！」

「うつぶはああ！ ごほ、げほおっ……は、はあい！ ここだよ、麻衣香さん！」

ワームの向こうから響く声に、びくりと肩を揺らしてミナは意識を取り戻した。甘ったるい虚脱感に包まれながら、必死に立ち上がろうとする。だが、依然として腕も脚もワームに絡まったまま、押しつけた腰を戻すこともできない痴態を晒すしかなかった。

「こ、ここにいるってばあ！」

ワームの間から麻衣香の顔が覗くが、自分の姿を想像すると顔から火が出る思いだった。さつきまでの痴態を見られたら軽蔑されるのは間違いないのだ。

「大丈夫かい、ミナ？ ふふつ、すごい格好になっちゃってるよ？」

おかしそうに微笑む麻衣香がワームを押し広げたことで、ようやく淫柱の束縛から解放された。そして窮屈な空間で、なんとかお互いの股布のねじれを直し合う。屈み込んだ白ウサギ姿の友人がねじれを直してくれている間、湧き出した淫蜜に気づかれないようミナ

は真剣に神に祈った。

「オッケー、直ったよ。まったく、どこ行ったのかと思ったよ。ほら、こっちだよ」

頬を朱に染めた麻衣香に従って再び歩き始め、またも衣服が乱れ、もはや皮膚の奥の奥、骨まで男たちの腐液を擦り込まれたと感じた頃、ようやく突き出した手が空を切った。

「やった、出口だ！」

すでに弾み続ける白乳を晒け出し、秘裂もはつきりと分かるほどに衣服の乱れた状態で、麻衣香はワームから飛び出した。続いてよろめきながら、白濁まみれの黒衣の兔少女も出てきた。荒い息を吐きながら、腕時計に目をやる。

（あと、八時間……こんなところで一時間も使っちゃったんだ……）

気持ちは焦るが、先を急ぐしかない。火照る身体に鞭打って、ミナは麻衣香の先を歩き始めた。皮膚に染み込みそうなほどに塗られた粘液の感触が気持ち悪かったが、洗っている余裕もない。無論、洗うための場所などないのだが。

「第一関門突破つてとこかな？ で、お次は何が出てくるっていうの？」

「次は……あれだ。リックコースターだつてさ。生贄は竜の背に跨り、快樂のうちに祭壇へと運ばれるだろう……だとさ」

パンフレットの説明文を淡々と音読した麻衣香だが、彼女の顔にもそれを聞いたミナの顔にも歓迎の笑顔など浮かぼうはずもなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>